

症例紹介 1

18症例の まとめ

犬食道内異物症例に対する治療

遠藤隼人(消化器科 勤務医)

はじめに

食道内異物は、食道の蠕動運動によっても食道を通過せず、食道内に異物が引っかかるもので、一般的に若齢小型犬に多くみられ、臨床症状としては、吐出、食欲不振、唾液過多などが認められます。食道内異物は、胃内異物、腸内異物に比べて遭遇する機会は多くはありませんが、発生した場合には急性の上部消化器症状を呈し、緊急的な対応が求められます。鑑別診断として巨大食道、食道狭窄との鑑別が必要となります。食道炎や穿孔を併発することもあり、合併症として食道狭窄、術創感染、誤嚥性肺炎などがあげられるため、異物を除去した後の予後管理も重要となってきます。

主訴

一般的に報告されている通り、今回の18例についても、急性の吐出、食欲不振、嚥下障害、唾液過多が認められました。穿孔が

診断

当センターでは、X線検査または内視鏡検査を用いて診断します。X線検査では誤嚥性肺炎や穿孔の有無に注意しながら造影剤を用いる場合もあります。巨大食道、食道炎、胸腔内腫瘤等と類症鑑別するために、また、異物の確認、診断後の異物除去も

治療

異物の除去は、①まず内視鏡による胃内への押しこみ、または②内視鏡による摘出を試みます。内視鏡による除去が困難と判断された場合は、③開胸下での食道切開による摘出を行います。今回の18例では、①内視鏡による胃内への押し込みが4例、②摘出が3例、③食道切開が7例でした。

予後管理

誤嚥性肺炎：嘔吐と異なり、食道内異物による吐出は、誤嚥性肺炎を引き起こす可能性が増大し、予後は極めて不良(死亡)となります。この誤嚥性肺炎を予防するために細心の注意が必要です。食道炎等からの食道狭窄を誘発されると、食欲不振等慢性消耗性疾患を併発するため、異物摘出後の食道内の粘膜の状況を見てPEG(胃ろうカテーテル)の設置を行います。18例中のうち食道粘膜の障害が重度な12例にはPEGチューブの設置ならびに長期間の絶飲食管理を行い、良好な結果が得られています。狭窄が認められる場合はバルーン拡張を行う必要もあります。

ご紹介いただく場合

食道内異物は、発生から長期間が経過すると食道粘膜の糜爛、潰瘍、壊死を併発し、治療過程において食道穿孔、食道狭窄を起しやすく、手術を実施した場合には縫合部の離開など

吐出・嘔吐の鑑別		
所見	吐出	嘔吐
特徴	食道、咽喉腔から食物やを排出する受動的動作	胃ときに上部十二指腸から食物、食物残渣、液体を排出する能動的動作
吐くまでの時間	数分～数時間	数分～数時間
吐物の性状	未消化物、粘液状液、泡沫状液などさまざま	未消化物、消化物
食事内容による悪化	ありうる(液体、ペースト、固形)	通常なし
前駆症状	なし	流涎、むかつき、おち着かない
吐く時の様子	努力なし受動的	腹部収縮を伴う努力性能動的
関連症状	呼吸困難、発咳	流涎、むかつき

今回、当センターで食道内異物と診断した犬18例について、その特徴、治療法と臨床経過を評価しました。異物の種類は犬用ガム(10例)が最も多く、次いで骨片や竹串などの鋭利な物(5例)、野菜や果物などの塊状物(3例)でした。

ある場合は呼吸困難も見られます。

考慮して、内視鏡検査を行い確定診断を行います。内視鏡検査による食道粘膜の観察、状態の把握が、処置や治療を選択する上で重要なポイントと考えています。



食道につまった犬用ガム(左)を内視鏡で除去した(右)



食道粘膜障害(左)がある症例に対するPEGの設置(中・右)



食道狭窄(左)部位にバルーン拡張術を施した症例(中・右)

の重篤な合併症の併発につながります。内視鏡による検査、異物除去、PEGによる食事管理が必要と判断され、当センターにご紹介いただける際は、出来るだけ早くご相談ください。